琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「手巾」を読む

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/972

芥川龍之介「手巾」を読む

小　澤　保　博*

A new Reading on Ryunosuke Akutagawa's The handkerchief

Yasuhiro OZAWA*

1

三島由紀夫の自伝小説「仮面の告白」の中には、昭和十九年九月平岡公威が学習院高等科を主席で卒業し、天皇より恩賜の銀時計を卒業式で拝受し、そのお礼の為に学習院院長山梨勝之進と同伴で皇居に参内する様子が記されている。

「高等学校の卒業式のあと、校長の老海軍大将とお礼言上に宮中へ行った自動車の中で、この目やにの溜った陰気な年寄が、私が特別幹部候補生の志願をせずにただの兵卒として応召するつもりでいる決心を非難して、私の体では列兵の生活にはとても耐えられまいと力説した。」(「仮面の告白」第三章)

若い三島由紀夫に揶揄されて作品に登場するこの海軍大将の訓示に平岡公威が反発する場面が、思い出として残されている。(三谷信「級友　三島由紀夫」笠間書院)

又、学習院院長の職にあった乃木希典が明治天皇に殉死した一報を受けた志賀直哉は、学習院高等科の卒業生として率直な感想を記した。「乃木さんが自殺したといふのを英子からきいた時、『馬鹿な奴だ』といふ気が、丁度下女かなにかゞ無考へに何かした時感ずる心持と同じやうな感じ方で感じられた。」(志賀直哉「日記」大正元年9月14日)

三島由紀夫もそして志賀直哉も学習院高等科の卒業生の一人として、学習院院長の職にある二人の人物に対する評価には手厳しいものがある。そして芥川龍之介「手巾」の登場人物である新渡戸稲造についてであるが、芥川龍之介が第一高等学校在学中、第一高等学校校長として在職して多くの学生に対して影響を与えた新渡戸稲造に対する芥川龍之介の評価はどうであったか。芥川龍之介の新渡戸稲造についての言及は少ないが、間接的にその評価を知ることは出来る。

「人間は色々汚いものを有ってゐるから、友達同士でも醜いものを遠慮なくさらけ出し合ふと、互に愛想が尽きて世は成立ない。(中略) 私は之を聴いて非常に憤慨しました。其の憤慨は時間にすると、彼是三四年も連続しましたが、」(芥川龍之介「明日の道徳」大正13年6月10日)

この芥川龍之介の回想でも分かるように、第一高等学校時代の新渡戸稲造の倫理の講義に講延に列した折の個人的な反感が、「手巾」(「中央公論」大正5年10月) 執筆の動機であることは明白である。「明日の道徳」には、敵対する自然主義文学についての容認する意見、「我鬼」(菊池寛「新小説」大正8年3月) の紹介がある。「手巾」執筆中芥川龍之介が、書斎に「我鬼窟」の扁額を書斎に掲げて創作に励んだことは周知の事実である。自然主義文学、白樺派、そして新思潮の同人の文学的目標が、我の追求であることを考えると、「あの男も此の位下等か、自分も其の位下等で宜いと云ふ様な事で、滔々として堕落する」(「明日の道徳」) というような新渡戸稲造の発言は、容認できるものではなかった。

*国語科教育教室

新渡戸稲造は、芥川龍之介が第一高等学校を卒業して東京帝国文化大学英文科入学と時を同じくして、第一高等学校校長を辞任、東京帝国大学法科大学教授に就任、植民政策講座を擔任したが、第一高等学校在任の最後の年、菊池寛退学について「前科者一高を志願す」（新渡戸稲造「実業之日本」大正２年５月）において菊池寛を弁護した。近年諸氏の研究により芥川龍之介「手巾」で揶揄されている新渡戸稲造の原型が、久米正雄「母」（「新思潮」大正５年８月）であることが、指摘されている。好奇心の赴くままに、第一高等学校校長の職責を離れて受験生の様子を見るために登校し、病身の息子を気遣う母のために気配りをし、自己の誠実を学生に訓話をして自己満足に耽る。キリスト者の一方的偽善に気付かずに、学生の反感を知らず買っているところなどは、芥川龍之介「手巾」と作品構図が同じである。

又冒頭「東京帝国法科大学教授、長谷川謹造先生は、ヴエランダの籐椅子に腰をかけて、ストリンドベルクの作劇術を読んでゐた。」という記述の後で、「手巾」本文中にストリンドベルクの「Dramaturgie」（「型」第三章第六節）の実際の引用がある。

「一俳優が最も普通なる感情に対して、或一つの恰好な表現法を発見し、この方法によって成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると敵せざるとを問はず、一面にはそれが楽である所から、又一面には、それによって成功する所から、動もすればこの手段に赴かんとする。しかし夫が即ち型なのである。・・・・・・・・・・」

これは、浅野洋「立教大学日本文学」（昭和58年12月）に拠れば、小宮豊隆翻訳「ストリンドベルクの俳優論（一）」（「新小説」大正４年３月）からの引き写しである。

2

大里恭三郎「芥川龍之介」（「Ⅱ『手巾』論」審美社）は、行き届いた論考で大里論文に導かれて、以下芥川龍之介「手巾」について考察を進める。作品の主人公、東京帝国法科大学教授長谷川謹造先生は、作者により次のように把握されている。

「先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顕著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧、或意味では、堕落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この堕落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいゝのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。武士道なるものは、決して偏狭なる島国民の道徳を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、欧米各国の基督教的精神と、一致すべきものさへある。」

クエーカー教徒として太平洋の橋にならんとする長谷川謹造（新渡戸稲造）が、ある日ベランダでストリンドベルクの「作劇術」を読んでいると、西山憲一郎という学生の母親が、息子の死亡報告のために先生を訪ねて来る。「多分、この小説は、事実に近い話と、末尾のストリンドベルクの『臭味』のある演技についての引例とを、つぎあはせて出来たものであらう。」（三島由紀夫「手巾」）という鋭い指摘がある。芥川龍之介は、第一高等学校時代、一高校長としての新渡戸稲造のエピソードと上記の小宮豊隆訳「ストリンドベルクの俳優論」の読書体験により「手巾」一編を創作したのであろう。

息子の死を語る母親は、息子の第一高等学校時代の恩師の前で微笑を浮かべながら、手巾を握り締めて身体全体で人生の悲しみに耐えるのである。長谷川先生は、対談中偶然に落とした朝鮮団扇を拾うために身を屈めることで、西山夫人の手巾を握り締める手が震えていることを目撃する。夕食時長谷川先生は、アメリカ人の奥さんに対して西山夫人のこの行為を日本の女の「武士道」であると言って賞賛する。この先生の独り善がりの自己満足が、ストリンドベルクの「作劇術」の読書によって破られる最終場面が、作品「手巾」の主題である。

「先生は、不快さうに二三度頭を振って、それから又上眼を使ひながら、ぢっと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。・・・・・・・」

アメリカ人の奥さんとの平和な語らいは、何故破れたか、先生の自己満足を破る予兆は何によってもたらされたか。以下、考察を進める。

「西洋の国民性に驚き、不思議に思った先生が西洋に対してエトランゼであったとすれば、『丁度、

その位な程度で』夫人の挙措を不思議に思う彼は、武士道という国民性に対しても異邦人であることになる」（清水泰次「将軍—問題点の所在について—」）について、適評であると評価して大里恭三郎「手巾」論は、最終的な結論に代えている。「武士道という国民性に対しても異邦人である」長谷川謹造先生は、作品中でどのように描かれているか。

「殊に、日本の巧緻なる美術工芸品は、少からず奥さんの気に入つてゐる。従つて、岐阜提灯をヴエランダにぶら下げたのも、先生の好みと云ふよりは、寧、奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然る可きであらう。先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思つた。」

クェーカー教徒のメリー夫人が、一般的なアメリカを象徴するには特殊すぎる存在である以上に岐阜提灯、朝鮮団扇は日本人の平均的な生活からは離れている。「奥さんと岐阜提灯」を日米両国の象徴としてみる長谷川先生は、異国趣味の日本を生活している奇妙な日本人である。日本で生活する日本人でありながら、「武士道」を英文著述し、ストリンドベルクの作劇術を独逸語で読む長谷川先生は、小説中の「梅幸」の名前を知らない。

「梅幸と云ひますのは、当時、丸の内の帝国劇場の座附俳優で、唯今、太閤記十段目の操を勤めて居る役者です。小倉の袴をはいた学生は、慇懃に、かう答へた。」

学生とのこのやり取りは、「俗流とは無縁な書斎的知識人の高邁な超俗性を表している」のでもなくて「芸術（演劇）を知らない長谷川先生を揶揄している」のでもない。日本人として日本で生活しながら、異国人の精神で日々を生き続ける長谷川先生を作者が一人の外国人として見做している場面である。「小倉の袴をはいた学生は、慇懃に、かう答へた。」のは、当時第一高等学校の学生であった芥川龍之介が、校長新渡戸稲造との直接のやり取りを後年、作品中に挿入した場面かもしれない。「慇懃に」という言葉には、学生の長谷川先生に接する態度が、外国人教師に対するものと同じものであることを感じさせる。

「しかし西山夫人の場合は、ごく自然に、顔で笑いつつ、手でハンカチを握りしめたのであって、それは決して、『演技』でもなければ、『型』を意識してなされた所作でもなかった。（中略）彼女の感情抑制は、伝統的な日本人のものであって、これをすぐさま武士道と結び付けて考えるのは短絡と言わざるを得ない。彼女の感情表現は、決して『演技』とか『型』とかを意識したものではなく、それは日本人にとって＜自然＞なのである。」（大里恭三郎「芥川龍之介」）

亡くなった息子が、生前に慕っていた恩師の前で微笑を浮かべながら、悲しみに体全体で耐える西山夫人は平均的な大正期の日本人である。戦後の日本人の場合は、この場合多くは声を上げて泣き崩れるであろう。現在の日本婦人で、息子の死の報告に手巾を握り締めて微笑を浮かべて、悲痛に耐える女がいたら自然な感情の流露ではなく、演技と見做されるであろう。

当時の平均的な日本婦人の自然な行為に対して「手巾」の主人公である長谷川謹造先生が、「日本の女の武士道」と誤解したのは、長谷川先生が米国、独逸での生活が長期に亘り日本人でありながら、日本人の生の生活感覚からずれてしまった結果である。長谷川先生の場合は空間的な距離が、西山夫人の自然な行為の意味の理解を拒んだのである。そして次に引用する三島由紀夫の場合は、時間的な隔たりが「手巾」の正確な作品理解を妨げたのである。

「そして人生と演技とが相渉る部分について極度に潔癖な自意識家の作者は、『手巾』では、無意識のうちに、西山夫人のステレオタイプな人生的演技を、一つの静止した形で、『型』の美とみとめてゐた。」（三島由紀夫「『南京の基督』解説」）

西山夫人の自然な行為を「人生的演技」と三島由紀夫に誤解させたのは、「一結構なおすまひでございます。婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見廻した。」（「手巾」）という作品中の西山夫人の言動である。「この『わざとらしく』も、視点人物の長谷川先生の主観と解釈するならば、作者は一切西山夫人を批判していないことになる。」（大里恭三郎前掲論文）とあるが、「わざとらしく」は、西山夫人の行為を説明する地の文で、作者の解説文として読むべきである。従ってこの箇所は「稍、わざとらしく」ではなく「無意識に」とでもしておいたら無難であったろう。「わざとらし

く」というやや悪意の意を内包する言葉を使ったのは、文章の修辞に拘る芥川龍之介らしからぬ失策である。職業夫人ではない、専業主婦である西山夫人にとって、白人の米国婦人を妻にしている東京帝国法科大学教授、高名な長谷川謹造先生の自宅を個人的な理由により訪問した折の心理的な緊張による意識的な動作、発言として理解すべき会話である。

「にもかかわらず、西山夫人は美しい。子供を死なせた悲しみを、膝のうえの一枚の手巾で耐えながら微笑する夫人の演技は、近代の批判精神から型（マニイル）として斥けられたにしても、彼女はなお美そのものなのである。『手巾』の作者は<無意識のうちに、西山夫人のステレオタイプな人生的演技を、一つの静止した形で『型』の美とみとめてゐた>という三島由紀夫氏の指摘は正確である。」（三好行雄「芥川龍之介論」）

三島由紀夫と生年を同じくする三好行雄も、西山夫人の日本人として自然な行為を時間的な隔たりにより「人生的演技」と錯覚した。大正初年において平凡な日本婦人の本能的、無意識な行為を美と把握した三好行雄は、時間的な隔たりにより「手巾」の主人公長谷川謹造先生と認識を同じくすることになったのである。戦前九州福岡で生まれ、東京で半生を送った三好行雄教授が、「西山夫人は美しい」「彼女はなお美そのものなのである」というからには、口元に微笑を浮かべながら息子の死を語りながら、ハンカチを握り締めた両手を椅子の下で震わせて体全体で悲しみに耐える日本婦人は、戦後日本社会から姿を消したと考えていい。

3

三島由紀夫や三好行雄が、日本婦人の自然な行為に対して「人生的演技」を感じて「型」の美を覚えて、長谷川謹造先生と同じ認識に立つことになったか。

「芥川は、長谷川先生や三島の言う武士道の<型>の美ではなく、<自然>の美を、西山夫人の仕草の中に見ていたのである。おそらく彼には、西山夫人が『日本の女の武士道』を演じたのではなく、全く逆に、武士道の『型』こそ、西山夫人流の日本的自然を形式化したところに生じたものだと認識されていたはずである。」（大里恭三郎「芥川龍之介」）

長谷川謹造先生が空間的隔たりにより理解を阻まれて芥川龍之介に揶揄されたのと同じく、三島由紀夫、三好行雄は時間的隔たりにより西山夫人の自然な行為が理解できなくなったのである。平成の現在の日本で西山夫人の行為が、皆無になったのであるなら新渡戸稲造「武士道」は、再評価されなくてはならない。「手巾」には、長谷川謹造先生を驚かせるベルリンでの体験が語られる。

「一昔、先生が、伯林に留学してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに当る、ウイルヘルム第一世が、崩御された。（中略）西洋へ来て以来、何度も先生の視聴を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。」（「手巾」）

ウイルヘルム第一世崩御の年（1888年）、二十七歳の新渡戸稲造はベルリン大学で農業史、農政学等を学んでいたから、「手巾」中のこの挿話もおそらく事実であろう。西山夫人の言動と共に作品中、長谷川謹造先生を驚かせる二つの逸話は、第一高等学校時代に芥川龍之介自身が、校長新渡戸稲造から直接講話で聞いた逸話であろう。西山夫人の口元の微笑の意味を理解できなかった長谷川謹造先生は、独逸にあっては独逸人の感情の流露も理解できなかった。「多分、この小説は、事実に近い話と、末尾のストリンドベルクの『臭味』のある演技についての引例とを、つぎあはせて出来たものであらう。」と言う先に引用した三島由紀夫の発言は、鋭い指摘である。以下「ストリンドベルクの『臭味』のある演技について」考えていく。

「一私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顔は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、臭味と名づける。・・・・・・・・・・」

ハイベルク夫人の「二重の演技」は、「西洋人の衝動的な感情の表白」が、時間の堆積により「型」となって定着した姿である。西山夫人の一連の動作は、当時のたしなみのある日本夫人の基本的な悲嘆の際の動作である。夫人の無意識の一

連の動作の集大成が、「武士道」という一つの定理に形式化された可能性がある。

「が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それらの平穏な調和を破らうとする、得体の知れない何物かである。（中略）が、今読んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と一」

長谷川謹造先生が、西山夫人の行為に日本人の「武士道」を連想して、米国人の奥さんに個人的に語って聞かせるところまでは、部分的に容認できる。しかし西洋人の感情の発露を形式化した「型」は、日本人の「武士道」とは、別個の存在である。「上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。・・・・・・」という作品最終箇所で、聡明な長谷川謹造先生は、自己の著作「武士道」における西洋と日本の安易な類比に気付いたようである。

聡明な長谷川謹造先生は、何故に（「武士道」）により「欧米各国民と日本国民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。」と安易な考えを持ったのであろう。「手巾」本文中の作者の作為的な説明によれば、長谷川先生の趣味的な日常生活にその原因がありそうである。「日本の巧緻なる美術工芸品」である岐阜提灯をぶら下げ、朝鮮団扇を使用し、英独の書物を紐解き、米国人の奥さんと日々を語り合う長谷川先生は、平均的な日本人の生活から遊離し、欧米の文化に対する理解も中途半端なものになってしまったのである。日本人として日本国内で趣味的に生きる日本人は、他国の文化理解も浅薄なものになる。

「ヴエランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリンドベルクを離れてしまふ。その代り、一しよにその岐阜提灯を買ひに行つた、奥さんの事が、心に浮かんで来る。」

長谷川謹造先生の毎日の生活が、平均的日本人から遊離した衒学的なものであるなら、対人関係もまた緊迫感のかけた、芝居がかったものになる。

「日頃から謹厳な先生の事だから、これが、今日のやうな未知の女客に対してでなくとも、（中略）やがて、時刻をはかつて、」

といった具合で人間関係も応接室を舞台での浅薄なものであることを、作者は揶揄しているのである。そして生の日本人と緊迫感を持って接したことのない先生は、応接間での会話でも躓くのである。

「そこで先生は思切つて、がぶりと半椀の茶を飲むと、心もち眉をひそめながら、むせるやうな声で、『そりやあ』と云つた。」

芥川龍之介「手巾」の主人公、長谷部謹造先生の肖像画は作者のいかなる恣意の解釈に基づいて創造されたか。実像である新渡戸稲造「武士道」との乖離は、どうか。以下、考察を進めて行く。

4

「芥川の『将軍』その他、ほとんどあらゆる作品に見られる英雄否定、美談否定は、思想といふより趣味の問題で、当時の浅薄な時代思潮の反映である。芥川はさういふ主題を、物語の中の合せ鏡で以て、ともかくも別の立場からも反映させてゐるが、菊池寛のテーマ小説をはじめ、当時の時代物大衆小説までも貫ぬいるのは、ほぼ同じ浅い懐疑主義である。」（三島由紀夫『南京の基督』解説）

三島由紀夫の鋭い問題提起により、新渡戸稲造「武士道」と芥川龍之介「将軍」菊池寛「三浦右衛門の最後」等に考えを及ぼして行く。

「英文武士道」（「Bushido the Soul of Japan」明治32年10月）の出版と各国語への翻訳と世界的な反響がなければ、「乃木将軍と日本人」（スタンレー・ウォシュバン）の出版もなく、日露戦争後の世界的な乃木将軍人気もなかったであろう。芥川龍之介「将軍」（「改造」大正11年１月）は、偉大な父親世代に対する息子世代からの反発である。

「モデルの乃木将軍を囲んで、同じやうに単純な中村少佐と、批判者であり、同時に作者の代辨者である穂積中佐が登場するが、この中佐は、戦争へ行ってもスタンダールやユーゴオを思ひ出してゐて、心中ひそかに乃木将軍を軽蔑してゐる。そしてエピロオグでは、穂積中佐の思想は、中村少佐の息子のうちに蘇へるのである。」（三島由紀夫「南京の基督」解説）

文学により軍人精神を批判する図式的対比構造

は、映画「きけわだつみの声」において顕著に見られるとして三島由紀夫によって批判されている。芥川龍之介「将軍」の系譜は、司馬遼太郎「殉死」「坂の上の雲」にまで辿ることが出来るが、福田恒存「乃木将軍と旅順攻略戦」(「歴史と人物」昭和45年11月)は、芥川龍之介「将軍」の系譜を現在の視点から過去断罪する方法論であるとして論破する。

今回、芥川龍之介「手巾」を理解する上で「手巾」の主人公長谷川謹造先生ならぬ、新渡戸稲造「武士道」(「三笠書房」奈良本也訳・解説)を一読して多くの事に気付いた。芥川龍之介、菊池寛が第一高等学校入学時に校長であった新渡戸稲造は、一般的には七年の校長在任期間中講義や読書会により、そのキリスト教信仰により多くの学生に対して人間的、人格的影響を与えたといわれている。その影響が、広大であり強力であれば一層、その人格に対して反発もあったであろう。

先に引用の三島由紀夫「あらゆる作品に見られる英雄否定、美談否定は、思想といふより趣味の問題で、当時の浅薄な時代思潮の反映」という言葉を再引用するまでもなく、芥川龍之介、菊池寛の作品は最終的に第一高等学校校長新渡戸稲造に対する反措定である。

「武士道」(第十四章「武士道が求めた女性の理想像」)には「源平盛衰記」を典拠とする貞女の鏡、袈裟御前の逸話が紹介されている。

「武家の子女の鑑とされた『あとま』はおのが夫を堕しめようとしている男から横恋慕されていることに気づいた。彼女はその不義の情事になびくとみせかけて暗夜にまぎれて夫の身替りになろうとした。そして恋の刺客の刃が彼女の捧げた首を刺し貫いたのであった。」(「武士道」第十四章)

言うまでもなく芥川龍之介「袈裟と盛遠」(「中央公論」大正7年4月)は、「武士道」に紹介された挿話を徹頭徹尾利己的な近代人、袈裟と盛遠として作り変えた作品である。先の引用の続きで三島由紀夫は、芥川龍之介について「主題を、物語の中の合せ鏡で以て、ともかく別の立場からも反映させてゐる」と部分的に評価しているが、菊池寛のテーマ小説については、「浅い懐疑主義である」と一方的に切り捨てている。

菊池寛のテーマ小説が、その反措定としての主題の多くを新渡戸稲造「武士道」を典拠としていることを以下考察する。

「武士道」(第十二章「切腹」)には、幕末、維新期英国駐日公使館書記官として「神戸事件」の切腹場面に立ち会ったミットフォード「旧日本の物語」から事件の当事者、備前岡山藩士滝善三郎の切腹場面が引用されている。

「拙者はただ一人、無分別にも誤って神戸において外国人に対し、発砲の命を下し、その逃れんとするを見て、再度撃ちかけしめ候。拙者今、その罪を負いて切腹致す。各々方には検視の御役目御苦労に存じおり候」(「武士道」第十二章)

Mitfordの"Tales of Old Japan"から「神戸事件」の犠牲者の最期の姿を写し取る「武士道」の著者には、維新新政府の弱体と、諸外国の強要に屈服する祖国日本の哀れな姿に対する憐憫は感じられない。

菊池寛「三浦右衛門の最期」(「新思潮」大正5年11月)が芥川龍之介「手巾」の一ヵ月後に執筆された事を考えると「武士道」から作品発想を得たことは考えられる。

「『命は惜しゅうござる、命ばかりは助けて下され。』(中略)自分は、浅井了意の犬張子を読んで三浦右衛門の最期を知った時初めて "There is also a man"の感に堪えなかった。」(菊池寛「三浦右衛門の最期」)

久米正雄「母」の二ヵ月後に芥川龍之介「手巾」が創作され、その一ヵ月後に菊池寛「三浦右衛門の最期」が創作されたこと考えると、「武士道」の反措定として菊池寛の創作動機を認識することは無理ではないと思う。「忠直卿行状記」(「中央公論」大正7年9月)も主題は、菊池寛自身の学生時代の些細な挿話であるが(「半自叙伝」)、素材は「武士道」(第八章「名誉」)に取られている紀州徳川家の祖、家康第十男徳川頼宣の大阪冬の陣での少年らしからぬ発言が、作品創作の反措定としてあったかも知れない。「やあ右衛門、常陸(常陸介、頼宣のこと)が十四のあるべきか」(「東照宮御実紀付」)、また新渡戸稲造が「武士道」執筆の素材とした「名将言行録」「西郷南洲遺訓」「東照公御遺訓」等は、菊池寛の日頃の愛読書である。

「武士道」(第十六章)には、「かくすればかく

なるものと知りながら/やむにやまれぬ大和魂」という吉田松陰の刑死前夜の和歌が引かれている。「武士道」（第九章）には、菅原道真の左遷を題材にした歌舞伎十八番「菅原伝授手習鑑」の近世的な主従関係が記述されているが、いずれも芥川龍之介、菊池寛等の唾棄した非人間的な逸話ばかりである。

「一方にはラフカディオ・ハーン氏とフュ・ウレーザー夫人がいる。また他方にはアーネスト・サトウ氏とチェンバレン教授がいる。（中略）この小論全体を通じて、私は言いたいことのすべてを、ヨーロッパの歴史や文学から、類似の例証をあげて説明しようとした。」（「武士道」第一版への序文）

このような対比研究は、「菊と刀」以来、一面の真理を突きながら恣意的な側面を多く持つ故に学問的研究としては、難点を指摘されている。

「武士道」の事例は、ことごとくが個人としての自我を喪失した英雄たちの美談である。日露戦争の勝利により、民族的危機を脱した大正期の時代風潮にあっては、反時代的奇談にすぎない。キリスト教的教養主義に裏づけられた新渡戸稲造の倫理の講義は、「明日の道徳」で芥川龍之介により反感を持って回想されているように、他者との接触では自我を捨てよ、という趣旨の講話である。そして第一高等学校校長新渡戸稲造の名声の背景は、十年前の「英文武士道」出版による世界的な名声である。芥川龍之介が「手巾」で新渡戸稲造を揶揄したさらなる理由は、「修養」（明治44年9月）を出版し、修養論で一世を風靡したことではなかったか。東京府立第三中学校を卒業、成績優秀のために無試験で第一高等学校に入学し、卒業成績二番で東京帝国文科大学に入学、さらに英文科を二番で卒業し大学院に在籍しながら、海軍機関学校の英語の嘱託教官になるまで芥川龍之介の経歴には、挫折の痕跡がない。芥川龍之介にとって修養論は、無用である。

新渡戸稲造「修養」を必要としたのは、芥川龍之介のような華麗な学歴、経歴を持たない一般大衆である。「修養」が、明治、大正、昭和と三代に亘って百四十版を重ねて新渡戸稲造の名声を不動のものにした事実は、一般大衆が修養論を必要としていたかということである。言い換えれば、芥川龍之介のような経歴の者には、教訓的倫理講座は必要ないし、修養論そのものが胡散臭いものであったはずだ。以上が、芥川龍之介「手巾」創作の主要動機であろう。

芥川龍之介が第一高等学校在学中、校長新渡戸稲造と個人的に接触を持ったと思われる頃、新渡戸稲造は実業之日本社の編輯顧問を引き受けて、雑誌「実業之日本」に修養講話の連載を始めている。また、同時期「婦人世界」「婦人画報」「婦女界」などに、婦人のための修養講話、煩悶に答える文章をたびたび連載した。（以上「明治文学全集88」（明治宗教文学集）巻末年譜に拠る）

「随想録」（明治40年8月）収録の「教育の目的」を今日読むと、福沢諭吉「学問のすゝめ」に通じる啓蒙期における論文集で、学問の実学的効用を説いたものである。学問が人生をいかに有利に導くか、と言った教訓的人生論を展開するのは、学制が整わない以前に学問を志して苦闘した第一世代特有の志向であり、学校秀才である芥川龍之介にとっては、泥臭い発想である。「十九歳、暑中休暇で帰省する三日前に母が他界。この悲しみが契機となり、生涯日本女性の悲しみに深い同情をよせる人となる。」（前掲年譜「明治十三年」の項）、さらに「十七歳、六月二日、同級生内村鑑三、宮部金吾らと共に、M・C・ハリスより受洗。しかしその後もしばしば宗教的懐疑におちいり苦悩する。」（「明治十一年」）とある。こうした新渡戸稲造の経歴は、決められた学歴と順風満帆の職歴を経て社会の人になった芥川龍之介にとっては、嘲笑、揶揄の対象でしかない。

新渡戸稲造の教訓的啓蒙書を必要とするのは、芥川龍之介のような学歴と職歴に恵まれなかった当時の一般大衆である。新渡戸稲造の社会活動を支えた背景は、「英文武士道」の著述であるが、櫻井鴎村訳「武士道」刊（「明治41年3月」）は、芥川龍之介第一高等学校入学数年前である。

新渡戸稲造「武士道」が推奨した事例は、今日から見ると白樺派は無論、芥川龍之介を含む大正教養主義の人たちが唾棄した事例ばかりである。大正教養主義、大正ヒューマニズムに連なる知識人は、伝統的には朱子学の影響下にある。武士道、とりわけその行動規範になった陽明学は、開明主義の知識人の忌み嫌うものである。明治開明主義

の代表である新渡戸稲造が、「革命哲学として陽明学」の事例を日本人を代表する行動規範として外国に英文で紹介するのは自己矛盾でもある。陽明学の「知行合一」により明治維新のような革命状況を準備した精神史的な事実は、大正教養主義の洗礼を受けた芥川龍之介には無縁の世界でもある。こうした背景を把握して、再度芥川龍之介「手巾」を読み返す。

5

冒頭の長谷川謹造先生が「ストリンドベルクの作劇術を読んでゐた。先生の専門は、殖民政策の研究である。」という設定は、どうであろうか。農業経済学が専門の新渡戸稲造は、ワイルドの"De Profundis"「深淵より」(1905年刊)、"Intentions"「芸術的意想」(1891年刊)を読んだりはしないであろう。

「ヴエランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。(中略)先生の思量は、ストリンドベルクを離れてしまふ。」というのも「長谷川先生は妻のことばかり考えて読書にも集中できない教授というわけである。」(「前掲大里論文」)というのは悪意のある解釈で、身に付かない読書のために思考が集中しない教授を揶揄している場面であり、百科全書的明治開明期の知識人を嘲笑している場面である。

「先生の信ずる所によると、(中略)奥さんと岐阜提灯と、その提灯によって代表される日本の文明とが、或調和を保って、意識に上がるのは決して不快な事ではない。」

この辺の記述には、芥川龍之介の新渡戸稲造「武士道」全体に対する根本的な懐疑がある。翻っては、明治初期の日本人留学生の滞米、滞欧州生活に対する疑問である。「先生の信ずる所によると」として紹介される長谷川謹造先生の考えでは、「日本固有の武士道」と「欧米各国の基督教的精神」とは、しばしば一致するのである。明治開明期に西洋合理主義の移入に携わった者には、日本人固有の「革命哲学としての陽明学」による神秘体験も「基督教的精神」によるオカルト体験も同一である。

「ヴエランダの籐椅子に腰をかけて」「(亜米利加人の)奥さんと岐阜提灯と」を等価に見比べながら「欧米各国民と日本国民との相互の理解」を模索し、「国際間の平和」を希求する長谷川謹造先生は、さながらポンチ絵の主人公である。「殖民政策の研究」が専門の先生は、結果的には興の赴くままに「欧州近代の戯曲及俳優を論じた物」に目を通しても、身を入れて読むことが出来ずに私的な自己満足の世界に視線を転じてしまう。実学重視の明治開明期の百科全書的な知識人たる長谷川謹造先生が、「イブセンとか、ストリンドベルクとか、乃至メエテルリンクとかの評論」に興味を持ち、中途半端な知識で若い学生に媚を売る姿は、「作劇を一生の仕事にしようとする」芥川龍之介にとっては、抱腹ものでもあったであろう。新時代の学生が、実学重視の先学の学問に対して覚える反感もある。

「武士道」と「修養」の二つの著書により名声を得ている新渡戸稲造は、学問の実学としての効用しか認めず、学問は人生を効率よく生き抜くための手段にしか過ぎないようだ。文学においては神秘主義に傾き、怪奇な話を「椒図志異」に収録した芥川龍之介は長谷川謹造先生の文学趣味について次のように紹介した。

「先生は、ストリンドベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に対しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。(中略)が、興味は、曲りなりにも、興味である。」

「教育の方法」(「随想録」)を一読すると、経済的代価を払いいかように教育効果を挙げて、相応しい実利を得るか、という方法論が展開されている。その方法は具体的で一般的な民衆を実利の世界に導くため示唆に富むものであるが、芥川龍之介の文学世界において無縁な世界である。

「西山憲一郎と云へば、先生も覚えてゐる。やはりイブセンやストリンドベルクの評論を書く生徒の一人で、専門は確か独法だつたかと思ふが、大学へはいつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。」

旧制高校生の頃文学に親しみ大学では、実学的な法学部に進学し思想的な煩悶の解決のために新渡戸稲造を訪ねるという設定は、整合性において無理はないが、芥川龍之介が、新渡戸稲造と個人的な接触を持ったという可能性は、皆無であろう。「手巾」(「中央公論」大正5年10月)の文学的な

成功で新進作家として地位を得た事、十年間の栄光に満ちた文学生活の後、自殺で生涯を閉じたことが新渡戸稲造に何らかの感興を与えた痕跡はない。

「一婦人は、顔でこそ笑つてゐたが、実はさつきから、全身で泣いてゐたのである。団扇を拾って、顔をあげた時に、先生の顔には、今までにない表情があつた。」

芥川龍之介は、この事を長谷川謹造先生の立場に立って「第二の発見」と言っている。

「先生は、意外な事実に気がついた。それは、この婦人の態度なり、挙措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。」

作者によれば、これが「第一の発見」である。日本人の平均的中流家庭婦人の無意識の動作に亜米利加人のように新鮮な驚きをもって接することの出来るのは、長谷川謹造先生が日本社会を外国人のように鋭い感性で見ている証拠である。先生が「日本の女の武士道」であるとして、自分が見聞したこの「第一の発見」と「第二の発見」を雑誌に所感を書いて送ろうとしたのも好意的に解釈すれば、日本人再発見である。さらに好意的に解釈するならば、実学中心に学んできて人間の感性を捉えることに疎い、明治第一世代に対する芥川龍之介等明治第二世代からの反感があるかも知れない。芥川龍之介は、後年森鴎外に対しても新渡戸稲造に対したのと同じ反感を示した。(「先生の短歌や発句は何か微妙なものを失ってゐる」)

実学の学問を修め、功利的な視点から修養の意味を説く新渡戸稲造に「武士道」の名において死んでいった者に対する精神的同情があったとは思えない。

「先生は、湯にはいつて、晩飯をすませて、食後の桜実をつまんで、それから又、楽々と、ヴエランダの籐椅子に腰を下した。」

「手巾」の最後で長谷川謹造先は、自己の信念に対して深刻な懐疑を抱いて思いに耽るという設定になっている。

「今、読んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と一(中略) ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。・・・・・・・」

この場面は、作者の芥川龍之介が作中主人公長谷川謹造先生に対して自己を反映させた場面であり、現実の新渡戸稲造が自己の「武士道」の著述に対して懐疑の念を抱くことはなかったであろう。明治第一世代の森鴎外、新渡戸稲造もその真実の等身大の姿を厳密に把握することが次の世代の者には困難になっていたからである。これらは「当時の浅薄な時代思潮の反映である。」というのが、三島由紀夫の解説である。

今日の日本では西山婦人の無意識の行為も存在しなくなり、西山婦人の微笑と動作の不均等に気付く長谷川謹造先生の存在もなくなった。再度新渡戸稲造「武士道」が評価され、再発見される意義がある。